「ヘテラルキーと統治の政治人類学―「中世」西アフリカにおける国家形成の理論的射程」アラビア語専攻４年 中尾世治

本稿は、著者のフィールドである「中世」西アフリカにおける国家の形成過程を、理論考古学的にモデル化し、それを発掘資料によって検証する目的で書かれた論文である。まず地域と理論の両面から先行研究を検討し、当該地域の国家形成過程についてのモデル構築に必要な、３つの問題設定を行った。すなわち、「普遍的」国家形成モデルを本質主義的と規定すると同時に、構築主義と対立しない視座を獲得し、次に、70 年代以降の生態学的機能主義における国家形成論の問題点を抽出し、最後に、当該地域に特有な権力のヘテラルキー概念を基にした新たな国家形成モデルを構築することである。最初の問題については、西欧文明の発展史や人類史の単線的時間推移の枠組みのなかで構築された国家概念を戦略的文化相対主義の立場から問い直すことによって、「中世」西アフリカの国家形成の研究自体がこれらの概念を新たに練り直し、構築していく過程として位置づけられることを確認した。次の問題では、流通論や生産関係論の批判的検討から、共同体の生計経済と政治体を支える政治経済とは基本的に別のものであり、不平等はまずイデオロギーが先行し、政治・経済的不平等がそれに続くことを確認し、文化や社会の類型でなく、政治体の類型化をめざす必要性を説いた。最後に、当該地域における国家装置に関与する、多重・多元的なイデオロギーや政治・経済組織（秘密結社、イスラーム、市場など）の観点を導入することによって、西アフリカの王権のもつ具体的機能を明らかにできる可能性を開いた。さらに本稿は、以上の議論で確認された諸概念をモデルとし、これを実際の発掘資料によって検証し、ヘテラルキー的な国家の存在を示唆した。

日本の考古学界では、発掘された遺物や遺跡を基に、当時の社会について経験主義的に解釈する「伝統」が根強くある。60 年代以降の欧米における理論考古学を、日本へ導入しようとする試みはいくつかあったが、いずれも頓挫している。そのため考古学の理論に関する文献は、基本的なものでさえ、まったく翻訳されていない状況にある。このような状況のなかで中尾氏は、権力や不平等が生まれるプロセスについての理論考古学の欧米文献を、多数渉猟する苦労を厭わなかった。その結果、国家という政治体へと発展する歴史的過程を独自にモデル化し、それを「中世」西アフリカの遺跡と遺物によって検証する作業まで行った点は、出色の出来映えと言えよう。対象地域の歴史研究に対して、批判的視野から新たな問題を設定し、さまざまな文献を調べ、文章にまとめ、さらに問題を深化させるという学問的行為を実践し、最後に新たな問題発見と研究の方向性を示した、高いレベルの論文として評価したい。以上の事由で、本稿を優秀卒論として推薦する次第である。